高等学校グランドデザイン会議第５回第２専門委員会概要

日時：平成１９年5月１５日（火）
　　１３：３０～１６：３０
場所：県立図書館　研修室

＜出席者＞
高山委員長　佐々木副委員長　一戸委員　伊東委員　工藤委員　佐藤和志委員
島谷委員　杉田委員　斗沢委員　野呂委員　馬場委員　福原委員　藤田委員
本谷委員

●開会

司会
　それでは、定刻になりましたので、ただ今から「高等学校グランドデザイン会議　第５回　第２専門委員会」を開会いたします。

●報告事項

【新任の一戸委員、島谷委員より自己紹介】

【事務局が、配付資料に基づき説明】

司会
　続きまして協議事項に入りますが、高山委員長からお願いします。

高山委員長
　委員長を拝命している高山です。終盤に近づいていますので、皆さんの忌憚のない意見を反映させながらより良いものを作って行きたいと思いますのでよろしくお願いします。
　お手元に資料として配っている、「高等学校グランドデザイン会議におけるこれまでの検討状況」が先般教育長に提出されていますので、これについて概要等を事務局の方から説明をお願いします。

事務局
　１月１６日の第４回第２専門委員会までの概要について、色々な意見がありましたが、委員の中で一部の方が原案として取りまとめたものを高山委員長の権限で文章にし、それを第２専門委員会の報告事項として３月２２日の検討会議に提出しました。その会議において了承された上で、若干の字句文言の整理をするという事で議長が引き取り、４月２３日に議長から教育長へ中間の意見の取りまとめという形で提出されたものです。あくまでも皆さんが議論された意見が載っているという事で、結論という事ではないと捉えています。

高山委員長
　この中間まとめについては事前に郵送していますので、御覧いただいていると思います。何回も話し合いをした中で、色々な意見が反映したものになっていると思いますが、これについて改めて何か意見はありませんか。
　中間まとめが教育長に提出された経緯について事務局から説明がありましたが、この中で一部足りない、検討していない部分がありましたので、今日はその部分について皆さんの意見を伺いたいと思います。中間まとめの９ページの一番下ですが、職業学科のうち、水産、家庭、看護について委員の中に該当する学校の先生がいない事から、該当する学校の校長先生に問題点、方向性等を含めて色々文章にしてもらったものを事前にお渡ししています。これについての話し合いが今日の主な所です。
　まず学科についてですが、水産は八戸水産高校。家庭は百石高校の食物調理科、弘前実業高校の家庭科学科、服飾デザイン科。看護は黒石高校の看護科。それぞれの入学者の状況、大学科の現状、進路状況の概要、今後の大学科の方向性という事で校長先生にコメントしていただきました。専門外で分かりにくい所があると思いますが、この部分について皆さんと話し合いたいと思います。まず私の方から概要をお話します。

【高山委員長が、配布資料に基づき説明】

高山委員長
　簡単に申し上げましたが、非常に分かりにくい水産、家庭、看護の状況についてよく書かれているので参考になるのではないでしょうか。答申に向けて、農業、工業、商業についてはいくつかの考え方を提示してきましたが、それ以外の水産、家庭、看護については、あまり理解されていない部分があると思いますので、レポートで補足して話し合いたいと思います。
　３つの学科の現状、今後の方向性等についてどういう感想を持ったか伺いたいと思います。

Ａ委員
　独特な水産高校については中身が分かりにくくコメントしにくい所がありますが、本県の状況を考えるとこのような高校は非常に大事だと感じています。今後は教育課程等を精査しながら、生徒の将来のためにきめ細かな指導をする事で、本県の漁業・水産関係に効果的な学科なのではないでしょうか。
　青森中央高校に家庭科はないのですが、生活科学系列があります。元々は普通科と家庭科学科とリビングデザイン科があった事で、家庭科の教員数も多く配置されています。生徒も１学年２４０人のうち６０人前後が生活科学系列を選択しています。また、最近は食育の問題が大きく取り上げられていますし、資格取得などきめ細かに指導しています。家庭科関係の高校はよく頑張っていると思います。本校は昨年度のファッション甲子園で本選に選ばれ、弘前市民会館でファッションショーをやりました。それを校内や、産業教育振興会の大会でも紹介しま

した。リサイクルの物を使ってデザインし、夏休みをかけて一生懸命準備していました。色々な事をやっていますので、生徒達にとっても効果的な学科ではないかと思っています。家庭科関係では半分くらいの生徒は進学しています。高校を終わってすぐに食品関係や服飾関係に就職する生徒もいますが、短大や専門学校への進学が半分くらいおり、その道を極める事も大事ではないでしょうか。

看護科は五所川原高校や三沢高校等にもあったのですが、今は５年制という事で黒石高校にまとめてありますので、これも非常に大事だと思います。

Ｂ委員

ファッション甲子園について少しお話します。県主導でファッション甲子園を全国的に打ち出して行くという事で武道館で始めたのですが、県でやるよりも民間主導型の方がより効果的だろうという事で、弘前商工会議所にやってくれないかという話が一昨年ありました。それで引き受けたのですが、実際やってみると非常に反響がありました。全国の高等学校に募集要項を送るのですが、デザイン画は３千通以上来ます。今年も審査会をするのですが、東京から５人ほど来てもらい審査し、４０組を選んで実際に型におこして弘前市民会館で発表するのです。終わった後には、賞に落ちた生徒達はどうして落ちたのか、受賞した生徒達も来年はどこに気をつけたら良いのかを聞きに集まります。デザインやファッションの先生に直接話を聞く場はほとんどないのです。交流会に参加しているのですが、全国的にファッションやデザインについて男女とも興味を持っている高校生が非常に多いと感じました。今年で６回目になりましたが、非常に残念なのですが、産経新聞が東京の服装学園と協力してファッション甲子園と同じ手法で今年からやると新聞に出ていました。それが我々のやった成果だと思いますし、色々な表現の場があってもいいと思いますが、そういう意味では、ファッションはアパレルだけでなく色々な部分があるので、高校からファッションについて勉強してもいいと思います。これからファッションやデザインは、若い人達にとって取り組んで行く学科だろうと感じていました。

夏休み前からかなり一生懸命やっているのが伝わって来ます。色々な高校生と話すのですが、一生懸命に頑張っています。スポーツもそうですが、成果を出すため、表現をするために非常に頑張っているのが目に見えて来ます。

高山委員長

専門の部分で言うと、社会とのつながりという面では、学校の中だけでは２１世紀の社会の変化への対応は難しいです。社会とのつながりは、特に職業教育では大切だと思います。

ここについて皆さんから、全部ではなく部分でもかまいませんので意見をいただきたいと思います。

Ｃ委員

何回か学校を見ていますが、八戸水産高校は唯一の高校ですので、希望している生徒は目的意識を高く持って入っている生徒が多いと聞いています。そういう意味では、勿論卒業した生徒達はかなり水産関係に就職してる事もありますし、

唯一の学校ですから、今の４学科より少なくしては水産の後継者の育成に支障が出て来るのではないかと思っています。入試の倍率もありますので、できれば現在の４学科体制でしばらく行ければいいと思っています。

高山委員長
　水産高校も農業高校も実習があると思うのですが、農業では工夫して育てて期間を経て最後に収穫するという実社会に近い実体験は、高校生が学校で学ぶ事が実社会でどう活かされているのか知る良い機会です。その過程で魚を捕ってみたり、農業体験をするという事は専門学科のプラスな部分になるのではないでしょうか。普通高校では体験できないでしょうから。

Ｃ委員
　６０日程度の長い航海もありますし、３日程度の短い航海もあります。県で唯一の学校ですのでそれなりの施設設備をしていると思いますし、育てる漁業や潜水の施設も充実しているので、できれば４学科体制で行ってくれるといいと思います。

Ｄ委員
　農業高校はだんだん市部からの生徒が多くなり、将来は農業関連に就職する、将来は後継者を目指すという生徒は少なくなっています。また、親も若くなっていて、卒業後の５～１０年は好きな職業に就いていいという家庭が多くなっています。その中でも、やはり兼業農家もかなりいますので、そういう意味では将来的な事を考えると農業高校の果たす役割はあるのではないでしょうか。農業高校は水産高校ほど専門関係に就職している訳ではありませんが、専門高校は、工業、農業、商業、水産を含めて、これからも存続して行く意味はあると思います。

高山委員長
　青森県は農業や漁業に就いている人数的には高いのですが、付加価値ベースでは人数の割合に対して低いです。傍目からデータ的に見ると、労働集約的と言いますか、魚や米でも人手をかけて取った物をそのままフレッシュなまま県外や海外へ出していますが、県内で一貫して加工して出すという工夫があってもいいのではないかと思います。農業は農業、漁業は漁業それぞれの専門家がいたとしても、どこかでコーディネートする人がいなくてはいけません。職業教育の中でも、実際の企業や実業界との関わりを持ち、自分が育てた物や採った物がどのように流れて行くのかという部分まで把握していた方がいいと思います。前回の委員会の中で出た、総合産業高校といった新しいタイプの高校にもつながる話になります。

Ｅ委員
　中学生にとっては大きく２つあると思います。ひたすら自分の学力を信じて、高校を卒業するまでは勉強一筋。あるいは、自分が好きな物や、何に向いているのかについて非常に早くから目を向けている。そういう生徒にとっては、自分の

家が漁業でなくても興味関心があればそちらを目指します。あるいは、家が工場でなくても工業を目指します。とにかく好きな部分から入るのです。

幸いな事に、例えば商業であれば昔は就職するしかなく、大学へ行くとなると色々な制約があって思うように行かないという事がありました。しかし、最近は専門高校からでも、途中から進学を目指す道も取れるようになっていますので、まず好きな所から入っても、最終的にはそれほど不利になりません。自分の好きな事からアプローチをして自分に向いている物を探して行く、そういう生き方をする上でこういう選択肢は非常に大切だと思います。ただ単に、生徒が少ない、普通科志向だからと言ってシフトして行くと、色々なアプローチをする子のいい部分が消えてしまいますので、私はそれをあまり望みません。そういう事では、今回の水産等も同じ事なのではないでしょうか。半分以上は進学していますので、好きな事をしてその延長線上にある進学先を選ぶ事もできるし、全然違う進学先を選ぶ事もできます。それはどこの学校も同じでしょうから、その存在価値は高いと思います。

ですから、水産高校について言えば、やはり県に１つしかないので、無くしてしまう必要性はどこにもありません。ただ、やはり少子化ですので、目指して来る生徒が極端にいなくなれば無くするしかないのですが、現状ではそうではなく、寮に入りながら県内あちこちから来ていますので、この道を閉ざす必要はありません。

黒石高校の看護科もそうです。全県とは言わないまでも、東青地区から１１％、西北地区から１７％、下北地区から２％、地元から７０％の割合で入学しています。１つしかないという事で、そこを目指して県内から来ています。存在価値が非常に高く、そこを目指す生徒が多く倍率もかなり高いのです。なおかつ、やはりこういう道に進みたいと考え、地元に残る生徒なのです。先日県立保健大学の進路状況が新聞に出ていましたが、４割は県外から来ていて、その生徒は県外に帰りますし、県内の出身者でも半分は県外に行ってしまうようです。ですから、黒石高校の卒業生は地元に残る生徒ですから、そういう事では存在価値が大きいと思います。

家庭科についても３つしかないという事ですが、資格取得や就職の面で非常に良いようです。また、食育という話もありますが、家庭科は担っている部分が非常に大きく、人間教育そのものなのです。しかし、家庭科の先生の話を聞くと非常に危機感があって、家庭科の単位数が今までは４単位で最低２人以上は教員がいたのですが、それが２単位でよくなったために、例えば５クラスの学校では臨時講師で間に合うようになり、教員は１人以下という状況です。一方では人間教育に踏み込むほど大きい役割を持っていながら、そういう状況ですので、ぜひ専門の家庭科がある学校へ異動したいという希望があるようです。自分達が担っている全ての分野で頑張れる学科が存在していないと寂しいでしょうから、独立の家庭科の学校はできないでしょうが、学科として何校かある分には大事にした方がいいと思います。

高山委員長

単純な質問ですが、実習船青森丸は県の施設ですか。

事務局
　はい。

高山委員長
　１隻だけですか。

事務局
　大きい物は青森丸だけですが、近海用の船もあります。

高山委員長
　凄くコストがかかるのではないでしょうか。大事にしたいと思います。

Ｆ委員
　私は以前から、大学進学率が上がる事は好ましくないと言っています。喜ばしいとは思っていないのです。やはり、地域に残る、そういう教育の仕方をするべきという考えです。職業学科、専門高校は本当に大事にするべきだと思っています。八戸水産高校は、全国でも有数の水産県としては絶対に必要です。黒石高校の看護科も、青森県が医師不足、看護師不足と言われる中で、田名部高校の看護科が閉鎖された時も残念に思ったのですが、やはりこれは県内の医療を見ると看護師の養成は絶対に必要だと思いますし、できれば南部地区に学科を新設してもいいのではないかとも思います。
　他の職業学科についても、それなりの目的が達成されているようです。職業学科を終えて地域に就職できるスタイルが望ましいのですが、そのためにはもっと産学の連携が大事だと思います。先日新聞に出ていましたが、農業高校が野菜の苗を販売し非常に好評を得たようですが、これは非常に大事な事だと思います。どういう苗作りをすれば受け入れられるのかという勉強、研究材料になる訳ですから。こういう形が、海産物の加工施設との連携といったような研究の連携や、これからは先生方と研究者の交流まで含めて、こういう関係をどんどん進めて行くべきだと考えています。職業学科はぜひ必要ですし、守りたいという考え方です。

Ｇ委員
　専門高校に勤めた事はないのですが、少なくとも八戸水産高校と黒石高校の看護科に関しては、絶対に無くしてはいけないでしょう。看護科に関しては、もう１校あってもいいのではないかというくらいニーズがあると思います。本校でも実際に志望する生徒は多く、そういう事を考えても看護科のある県立高校が１校というのは少ない感じさえします。家庭科については良く分からないです。

Ｈ委員
　今回の意見は非常に実状をよく表していますし、青森県で水産、看護はいらないという人はいません。水産の部分で書いているように、今は厳しいが後継者は

すぐには育たないので長い目で学校の存続を考えて欲しいという事が、専門高校全体に言えるのではないでしょうか。今の状況だけではなくて、今後の県の在り方や状況を踏まえた時には、今ある専門高校全部が必要となります。どうあるべきかという部分については色々あるとは思いますが、社会に出てから地元に残るのは高校卒業者が圧倒的に多いのです。その人材を社会に出しているのが専門高校の役割で、県内人材確保の役割を今も担っています。普通科志向という事に関してですが、志向はそうかもしれませんが、出口の面から見ると、就職する人のかなりの数は専門高校からの生徒ですし、離職率も専門高校からの生徒の方が少ないはずです。専門高校はいわゆる専門知識だけではなくて、社会に出てからの知識も含めて社会人としての教育をきちんとしているからです。卒業後の会社が求めている事を考えて、再編について検討して行くべきでしょう。

Ｉ委員

青森県として、海洋国日本として、海は無限の資源です。エネルギー面では潮流や温度差を利用した発電があり、さらに食糧供給の面や、鉱物資源もたくさんあります。しかし、実際に海を直接利用できるかというとそう簡単ではなく、必ず海を知る人が必要になります。そうすると、接点となる水産高校はどうしても欠かせません。一方では、海の囲い込みは始まっていますので、現場に密着した水産高校は重要です。

中学校の生徒の色々な選択肢として、普通高校に興味を持てない子もいるので、専門高校は時代に応じて作られ、今でも存在意義はあると思います。生徒にとって大事なのは、入口はどこから入っても、出口は好きな所から出られる事が大事だと思います。そういった用意をする事の方が大切です。水産、家庭、看護等たくさん入口を用意し活かす事も大事ですが、出口もたくさん用意してあげた方がいいと思います。

Ｊ委員

目的意識が非常に強い生徒が集まるという特徴があるのではないでしょうか。特色ある学科としては英語科等がありますが、それらは文系の学科なので目的となると普通科と色合いが近くなると思います。八戸水産高校は鰺ヶ沢や下北からも生徒が入学すると聞いています。この資料でも、目的意識を持って来るという部分が非常に印象に残ります。地元に残ると考えると、八戸水産高校の役割は非常に大きいのではないでしょうか。普通高校からも水産大学へ進み知識を学んで全体を見る立場で働くチャンスはあるのですが、戻って来るという点では弱いのです。県庁に技術系で入る事はありますが採用は少ないので、力のある生徒はいてもどれだけ地元に貢献できるかとなると、こういう地域に密着した高校は重要です。

黒石高校の看護科は何がいいのかと言うと、最短５年で看護師の受験資格が得られる事です。普通高校からでは専門学校を経由するので６年以上かかります。それよりも短い時間で、地元に即戦力で貢献できる生徒を育成するという点で、黒石高校の看護科は重要だと考えています。県南にも欲しいという話がありましたが、最短で受験資格が得られるという魅力を考えるとあってもいいとも思いま

すが、実習でびっちりカリキュラムが組まれているために進路変更は厳しく、出直すには逆に長い時間がかかってしまうというデメリットがありますので、作る事には慎重になる面があります。役割は大切なのですが。

百石高校の特徴ですが、八戸市の生徒と地元おいらせ町の生徒とで約半々の割合になっています。商業科や食物調理科についても、市部の高校の影響が出る事も無い訳ではありません。

田名部高校は普通科です。その中で一生懸命に取り組んでいるのは職場訪問です。商工会議所と連携してむつ市内を全員で訪問させていただきましたし、裁判所等は県が実施しているジョブカフェを活用しました。接点という点では専門高校は勿論密接なつながりがあるのでしょうが、普通高校もこれからは社会との接点を多く持つ方向で進められるのではないでしょうか。

Ｋ委員

これらは実学的な要素が強い分野だと思います。資格を取得しないと高校を卒業できないという色合いがあり、職業に直結するので生徒の意識も高いでしょうし、入ってからも頑張るのでしょう。黒石高校の就職状況を見ると就職者３３名のうち、県内は２１名、県外は１２名で、県内の方が１０名ほど多いのです。この傾向のまま行けばいいのですが心配があります。診療報酬の問題があり、患者７人に対し看護師１人という体制を取った方が診療報酬が高くなるので、これまで患者１０人に対し看護師１人という体制だったのが、病院も看護師を集めるようになり、もしかすると待遇条件がいい都会へ県内から働き盛りの看護師が出て行っている可能性があるのではないでしょうか。そのために県内に空きが出て、その補充という形で黒石高校の県内就職が多い状況があるのかもしれませんので安心はできません。産婦人科の医師がいない事からも分かりますが、診療科が減ると看護師もいらなくなる状況があります。専門高校は一生懸命に頑張って取り組んでいると思いますが、働く場、受け皿が減少して行くと、立派な教育を受け立派に育った生徒が県外に流れて行くという傾向が他の学科でも出て来ると思います。資格を武器にして自分の将来設計を立てる、そういう学科は残して行きたいと思います。

Ｌ委員

今出ている３つの職業学科の話は、中間まとめを作る際に残された部分の話ですので、私は中間まとめを踏まえての話をしたいと思います。

第１専門委員会の部分ですが、普通科等、職業学科、総合学科の募集割合という事で、「中学生及び保護者には普通科への志向が強くあることから、普通科の比率を高める事が望ましい。そのため、職業学科の統合・再編や、総合学科の見直しなどを進めることにより職業学科及び総合学科の割合を減らすことで、普通科の割合が高まることが望ましい。」とあります。よって、３つの職業学科についても慎重に考えたいと思います。大きな問題として、県の少子化と財政難がありますから。

中学生の志望としては普通科志向が高いという話は、以前この第２専門委員会の委員からも話がありましたので、普通科もそうですが職業学科の統合・再編や

総合学科の見直しは考えなくてはいけないと思います。
　水産高校ですが、資料に載っている入学者の状況を見ると強く望んでこの学校に入学しているようですし、アンケートでは保護者の８５％が入学させて良かったとしている事から、かなり強く水産高校を残すべきという結論になると思います。しかし、４学科ありますから、他の学科と合体できるかどうか等を考えなくてはいけません。
　黒石高校の看護科については、五所川原高校等と統廃合をしていますので、更に現状より規模を縮小する必要は無いのではないかという気がします。
　また、家庭についてもこの資料ではニーズが高いと書いていますが、水産ほど絶対無くては駄目だとは強く伝わってきません。農業や芸術と結びつく事で更に深まる可能性があるという意見も資料には載っていますので、統廃合も進められるのではないかと思います。その時の前提として、全てではありませんが高校入試が複数年１倍を切る状況が続くとかは１つの基準になると思います。

高山委員長
　今まで皆さんから色々な意見を伺いましたが、これまでの職業教育の再編という事では、看護科と水産高校は１校づつで存在価値があり現状でいいという事でしたが、果たしてそうでしょうか。問い直したいのは、今後１０年を見据えて、社会の変化の中で少子化・高齢化が進み、産業が変化する中で現状のままでいいのでしょうか。こういう方向性が望ましいのではないかという意見を伺い、残された部分のとりまとめに意見として載せたいと思いますので、時間軸を変えて、１０年後をイメージして、産業の中でどういう位置づけなのか、青森県の経済状況を踏まえどうあればいいのか、という将来の視点を入れてお話してください。

Ｋ委員
　その前に、議事概要によると検討会議からは「玉虫色では困る」と言われたようです。我々第２専門委員会は社会の変化と多様な進路志望に対応する多様な学科・コースをメインに検討している訳ですが、この中間まとめの内容の中には玉虫色のままの話が載っているのか、修正して載っているのかを確認したいと思います。

事務局
　中間まとめの１０ページ「（４）新しい学科・コース等の設置の必要性」、１１ページ「（５）統廃合による新しいタイプの高校の可能性」についてだと思いますが、検討会議の意見を反映していると認識しています。

Ｋ委員
　それでは、委員長が言ったように、様々な変化の中で１０年後を見据えて話をすると玉虫色でなくなる話が出るのですね。

高山委員長
　最後に話そうと思っていたのですが、中間まとめでは突然に個別項目が出てく

るという事がありました。我々は社会の変化とこれからの高校教育の在り方について話してきましたが、リードの部分が無いのでそこは私が担当し、皆さんから１０年を見通した話をいただき、文章を作って流れを良くし、その中でそういう曖昧な部分もまとめたいと思います。

佐々木副委員長
　５年前に田名部高校の看護科が廃止されたのはどうしてか伺いたいです。

事務局
　田名部、五所川原、三沢、黒石に衛生看護科があったのですが、法律が変わり受験資格のために必要な単位数が増えたのです。高校３年間で准看護師の受験資格を得られるようにしている県もあるのですが、単位数が増えたので普通教育の部分を凄く圧縮しなくてはいけなく、それで准看護師しか受けられないのであれば、本県では看護師を育成したいという事で５年一貫教育を選択しました。実習時間が増えたので近隣に受け入れてもらわなくてはいけなかったのですが、実習に関してはなかなか難しいという学校もあり、黒石高校は弘前大学病院も近くにあり、実際色々なやりとりがあり黒石高校になったようです。どの学校も残したかったとは思いますが、色々な制約の中でやれるのが黒石高校だったのです。

佐々木副委員長
　診療報酬の体系が変わって、今看護師が少なくなっているという新しい状況があります。県南では千葉学園があり、看護科は必要だという認識は皆さんが一致しているのではないでしょう。黒石高校の入学者の３割が東青、西北、下北からの生徒で、７割が地元の生徒です。おそらく八戸水産高校も同じ状況ではないでしょうか。県内に１つしかないような学校については、その地域外から水産や看護の勉強をしたいという生徒を受け入れる環境の整備、つまり寮生活や通学ができるようにするというような考え方はできないのでしょうか。
　総合産業高校は、これから必要になるのではないでしょうか。中間まとめでは工業高校系の定時制の廃止に触れられていますが、総合産業高校にその定時制も含めるという考えもできそうな気がします。また、そういう新しい産業高校的な学校ができたとして、学校に通いにくい人も入学できるように、専門高校を統廃合する中で不必要になった校舎を寮にするなどもできるのではないかと思います。これから柱になるのは新しいタイプの高校の可能性だと思うのですが、これからどういう特色ある学校を作るにしても、通学が非常に困難な地区の対応をどうするかが、新しい学校等を考える際の大切な判断材料の１つになるのではないでしょうか。

高山委員長
　十分くらい休憩にします。

休　　憩

高山委員長
　前半は水産、家庭、看護など、統合等で数少なく残っている専門高校について意見を伺いました。少なくなっているが存在意義がある。また、増やしてもいいのではないか、という社会の流れを反映したコメントをいただいたのですが、現状はこうだがこれからどうなるのかという部分を示すコメントをいただきたいと思い副委員長からもお話をいただきました。社会の変化は誰も予想できませんし、何があるか分からない中ですが、お話を聞いた上での私なりの意見なので違うかもしれませんが、県内の高校を卒業した生徒が県内で働けないという状況は避けたいと思います。これは学校だけの問題ではなく、我々民間の県の経済に関わる、あるいは企業の経営に関わる問題です。高校生が夢を持ちながら社会に出て、３年後には７割が離職するという事は問題です。働く場所、意欲に関わってくるのでしょうが、今後１０年間でどうなるかと言うと、確実に言えるのは生徒が少なくなるという事です。そこで、もっと開かれた学校、産業や実業など、社会との関わりを取り入れる事で少ない予算でより高度で実状に即した教育が可能になると思いますので、地域性を絡めてお話いただきたいと思います。

Ｆ委員
　まず少子化が前提なのでしょう。先程職業学科を大事にしたいと言いましたが、それは子ども達に地域に残って欲しいという願望でもあるのです。ただ、第１専門委員会で出ている普通科志向のしわ寄せがどうしても職業学科に向けられ、蹴落とされる状態になっているという危険性を憂いているのです。おそらく県の立場からすると、先生の配置を考えなくてはいけないのでしょうが、職業学科に向けられる先生の割合は当然に厳しいと思います。ですから、方法の１つとして、産学連携の中で臨時講師を手当するという方法を考えてもいいのではないでしょうか。
　先程も出ていましたが、玉虫色にならざるを得ないという事は、諮問機関ではやむを得ない部分もあります。「考える必要がある」「進める必要がある」「研究するべきである」など、全て玉虫色なのです。中高一貫教育について、大湊高校に関しては実態にそぐわないので廃止して欲しいと言ったのですが、中間まとめでは「今後は設置者である関係市町教育委員会と県教育委員会が評価と検証を行い、今後の方向性を示す必要がある」となっています。全てこういう形ですので、この専門委員会で出た意見は検討会議に上げるのでしょうから、これはいらない、これは残す、とはっきりと出した方がいいのではないでしょうか。新聞に出ていましたが、中間まとめに対して県民の意見はありましたか。はっきり意見を出すと、それに対しては意見が出るのでしょうが。

事務局
　今のところは１件だけです。

Ｆ委員
　委員長にお願いしたいのは、もっと強い態度でと言うか、本県はこうなんだという部分があってもいいと思います。

高山委員長
　第１専門委員会のとりまとめはこの中間まとめで初めて見たのではと思うのですが、その部分について次回の検討会議では副委員長とも相談して、我々はこう考えるという部分は出して行きたいと考えています。聞いた意見を私が潰して全て玉虫色にするという訳ではありませんので忌憚のない意見をお願いします。

Ｅ委員
　これまでは、専門高校や総合学科について共通理解を図り、役割は大きいという事で進んで来て、前回からその上で具体的にどうするという話になったのですが、今日は検討し残した３つの学科を取り上げたため、良い所を挙げてやはり必要だとなり、結局全部必要だという所に来てしまいました。基本的に選択肢は減らさない方向だと思いますが、今のまま全部残すという事ではなく、中学生の希望に合っていてこうなっているのかという事を言っているのです。つまり、家庭科にしても、そこに来ている生徒が本当に希望して来ているのでしょうか。商業高校であれば、かなりの部分で希望しなくても来ている子も現にいますし、そういう子を少なくして行って、その上で定員が満たないのであれば、当然減らして行かなくてはいけません。
　もう１つは、数少ないこういう選択肢の学科はやはり本当に定員を割るまでは残していいと思います。逆に商業高校であれば県内にいくつもあるので、トータル的にはそんなになくてもいいのではという気がしますが、現在５校あるのが２校でいいとは言えません。ただ減らせばいいというのではなく、それなりの説得力がなくてはいけません。１０年のスパンは長過ぎるので、前半の５年で生徒の本当の希望がかなうような選択を旨く整備し、その上で学科を考えるという方向が必要だと思います。その方法としては、専門高校においては３５人学級を実施していますが、商業高校はやっていないので思い切って３５人にして、その分を普通科に定員を回してはどうでしょう。普通科の定員を機械的に上げると私立が困るでしょうから、県内の定員総枠はそのままにして、商業高校から生徒の希望の多い普通科に回すのです。生徒の希望に合っていないという批判はあるかもしれませんが、そこをやってからでなくてはいけません。学科の再編は必要だと思いますが、商業高校ではデザイン科は特色があり多方面から生徒が来ていますが、情報処理科と商業科は区別が無くなって来ていて、中学校への説明会でも理解してもらえない事が多いです。このように、学科の再編は勿論やって行かなくてはいけないのです。
　もう１つは、農業高校と工業高校を統合するというような高校について、それで本当にいいのかを問いたいのです。他県でも旨く行っていないですし、農業高校と工業高校を一緒にして新しい建物を建てられないのであれば、簡単に旨くは行かないと思います。ただ、全く新しい専門高校を作る可能性は賛成ですが、ただ将来１０年を見据えてというのは難しいです。その場合は新しい学校を作るので、財政難な状況に逆行するのでかなりの覚悟が必要でしょう。ただ魅力ある学校を作る、時代に合った専門高校を作るという意味はあると思います。

Ｊ委員
　工業高校と農業高校は既に定員３５人で、商業高校でも定員４０人から３５人とするというお話ですが、定員が将来的に３０人になると定員割れではなくなる訳です。将来は定員３３人とかになるのでしょうか。それとも、３５人が下限と決まっているのでしょうか。

事務局
　基本的には、国の標準である４０人が根本だと思っています。ですから、先程のアイデアは一理あるのですが、３５人にしたのはそういう意味ではなく、専門性をより高めるため実習が旨く回るように３５人としたものですので、この問題と一緒にして考えるのは難しいです。３５人でやっても、３０人でやっても、教員は定員４０人で換算しますので、必ずしも学校にメリットがある訳ではないのです。

Ｅ委員
　普通科志向で普通科を増やすとなると、県全体で定員が増えてしまいます。そうすると私学は絶対に納得しません。生徒の希望を満たすために普通科の定員を増やすのと並行して、その他の学科を統廃合する前提でなければ子どもの希望は達成できません。

Ｈ委員
　入口の部分での希望を満足させるべきだという前提での話だと思いますが、出口の部分の希望から、社会として、大人として誘導するという事も１つの視点としてあるべきなので、この場ではその辺からも考えるべきです。

Ｂ委員
　１０年先という話が出ましたが、確実にやって来るのは生徒数の減少だけです。また、今は４０人１学級という国の制度で交付税が入って来るので、それを３５人などに減らす事によって県単独の支出が増えてしまう事も課題だと思っています。今商工会議所が一番危惧しているのは地域経済です。１０年先に今よりも明らかに良くなるという保証は１つもありません。市町村合併をして公務員の数も減り、銀行も支店等の統廃合をし、メディアもそうです。社会全体が人を減らして行っています。知事が頑張っていますが、いくら公が頑張ったとしてもそれに相応した雇用の創出はなかなか難しいと思っています。毎日そういう資料を見ていますが、明らかに良くなる方向はないのです。良くなると言いたいのですが、青森県においては良くなる方向性はありません。昔は一度東京に出てみたいという考えがありましたが、今はここで暮らせないので東京に行くのです。
　普通高校について定員の削減は避けて通れないですし、職業については地域に根差した形で県単独の支出を使ってでもある程度は残して行かなくてはいけません。と言うのは、大学に入れたいと思っても親の経済状態で入れられないという人が非常に増えています。子どもが２人いると、両方は大学に入れられないのが実態です。これからは高卒が大分増えて行くでしょうから、普通科を卒業して社

会に出すのか、あるいは社会に出て即戦力となるような学科を１０年後を目指して作って行くのか。そこをしっかり考えると、おのずと結論が出ると思います。

高山委員長
　あまり楽観できる材料はありません。親の学資負担を考えると、子ども２人を大学へ行かせるのは難しいです。特に工業系は大学院へ行くのが普通ですし、負担が非常に大きくなるのは目に見えているのに、収入は増えません。

Ｂ委員
　年収７００万円が多い時期もありましたが、今は５００万円以下になってしまいました。それで大学へ行かせられるかというと、とてもじゃありません。まだ公務員は良い方で、普通の会社になると５００万円程度です。

Ｆ委員
　地域性もありますが、５００万円はまだ良い方です。

高山委員長
　普通高校と職業高校で分かれるし、普通高校の中でも、難関大学進学を目指す学校とそれ以外とで分かれますし、色々なタイプがあると思います。地元志向もタイプで違いますし、地域性でも違います。考えると１０年先は非常に見通しづらい部分はありますが、結局景気が良くなっても愛知や首都圏が良いだけで、そこに人が吸い寄せられているだけの話なのです。稼ぐためには行かなくてはいけなく、息子が就職で県外に行き、老後どうしようもなくなると引き取って行く。そうして人口減に拍車がかかり、ビジネスチャンスも減って行くのです。開業よりも廃業の方が増えて来ていて、新しくやる人は少なくなっているので、働く場所が減る中で、見通しにくい部分がありますが、職業意識を持つなり、学業の上昇志向を持つなり、即戦力を目指すなり、より実践的な教育が産業界や家庭では求められているのではないでしょうか。その中で、卒業する人は出口が広がっていいのではないでしょうか。限られた中で何を考えて行くかなのです。あれが欲しい、これが欲しいという時代ではありません。

Ｂ委員
　同じ意見です。

佐々木副委員長
　１０年後の見通しというと格差の問題は避けて通れないと思います。地域には職場が無いので若い人が減り大都会へ行くという流れはおそらく続くのでしょう。実業の日本という言葉があります。非常に叙情的な話なのですが、３年前に亡くなった石垣りんさんという女性の詩人が虚業と実業という言葉をとらえ、実業は本当に大事で虚業は嫌いだと言っていました。専門高校は即戦力など色々な言い方をされていますが、きちんと働くという事をしっかり考えた方がいいのではないでしょうか。この中間まとめの中には、普通科を増やして行き、総合学科や職

業学科を減らして行くべきという指摘がありますが、第２専門委員会ではそうではないかもしれないときちんと打ち出した方が良いのではないかと思っています。これから１０年後ですから、今の看護の問題でも、５年前はそうでも今となっては診療報酬の関係でこんなに大変な状況に変わっていますし、医師を確保するためにあの手この手を尽くしているという状況が実際に出てきています。要は伸縮の問題です。良い時には伸ばし、需要が少ない時には縮める。ゼロにはしない。可能性としては常に残しておくのです。学科を統合しても良いのですが、根は必ず残しておくのです。抽象的な言い方で申し訳ありませんが、それが本当は必要なのではないかと思います。普通科は勿論必要ですが、実業の大切さについて第２専門委員会として意思統一して、第１専門委員会に分かってもらうようにした方がいいと思います。

Ｈ委員
　確認ですが、第１専門委員会の言う普通科志向は、上級学校に行くから普通科を志向するのか、決めかねているが専門高校よりは普通科の方がいいという事なのか、どんな感じなのでしょうか。分かる範囲でかまいません。

事務局
　その両方ではないでしょうか。決めかねて先送りという考えもあるでしょうし、上の学校に行くためには普通科に行った方がいいという考えもあるでしょう。
　ただ、中学校の先生に聞くと保護者・子どもはまず普通科という話です。職業高校の出口の魅力が十分に伝わっていないのかもしれませんが、やはり普通科志向だと聞いています。

Ｈ委員
　専門高校でも進学率が４割で、その半分の２割が４年制大学へ進んでいますが、中学校や保護者にはほとんど知られていません。専門高校イコール就職だけと考えがちですが、専門学校を含め、４割は上級学校へ行っています。大学に関しては推薦入試も増えていますし、全入時代という事も含めて、普通高校からでなくても十分に上級学校へ行ける状況にあります。入ってから、高校での普通科目が少ないので苦労するのは現実ですが、今は補習授業で対応しています。普通高校でなくては上級学校への道が閉ざされてしまうのではなく、実態としては専門高校でもかなりそういう道はありますし、これからは増えるのではないでしょうか。中学校の時点で専門が決まった生徒は、専門高校から上級学校に進む道はありますし、そういう子どもが入って来ている比率が水産高校は高いです。また、就職しなくてはいけないので専門高校へ行くという子どももいますし、そういう要求が何通りかあって、専門高校の方から選択肢を広げてやれる状況が青森県にはあるのではないでしょうか。

高山委員長
　学校見学会などで、地域へ学校の現状をPRする工夫が必要なのでしょう。様々な先を見据えてという事で、経済の姿は厳しいという認識をしていただいたので

はないかと思いますし、それに伴い、社会に出る、進学するという事に対応する学科の問題の部分もありますし、広がってくるのではないかと思います。第１専門委員会の部分については、それが最終答申にどうなるかは分かりませんが、皆さんの意見をまとめた話はしてみたいと思います。

これまでは専門高校の話が多かったので、普通高校の幅広い進路や就職、進学等についてお話をいただきたいと思います。

Ｋ委員

生徒数が減るという事は、学校の活気が減る事につながって行きますが、既に学級減をした学校でも、それなりの進学、就職、教育活動の実績を上げているので、やはりそれなりに努力しなくてはいけないと思います。ただ、生徒数が減るという事で考えて行くと、例えば部活動で遠征する時の遠征費なども減って行くので、内部でのやりくりをしなくてはいけません。校内の教育活動を今までのように維持するためには、内部では金銭的に様々な工夫をしなくてはいけなくなる状況はあります。

また、どんな形で統合が進んで行くのかシミュレーションできなくて困っていますが、やはり内部の努力で考え工夫しながら少子化に対応して行くのだろうと思います。

Ａ委員

私が本校を引き継いだ時の大学等進学率は２０％程度でしたが、今年は４３％まで上がりましたし、薬学部進学やAO入試など様々な挑戦をする生徒が出てきて、総合学科をやって非常に良かったと思います。私達も宣伝しますが、卒業生が宣伝してくれますので、本校の評価は上がって来ていると思います。

やはり、学校規模が小さくなるという事は色々な影響が出て来ますので、実は５年先を考えています。生徒会の予算の使い方では、以前は宿泊費も交通費も全額支給しましたが、もうそういう時代ではありません。これから先は、学校規模が小さくなる事を考え、色々な支出を抑えて行かなくてはいけませんので、今から工夫しています。とはいえ、お金が残せる状況ではありません。例えば、演劇部が京都に１週間泊まると１００万円以上かかりますし、昨日も高校野球で県大会に出場する事になったので、校長としては嬉しいのですが、お金のやりくりが大変です。県教育委員会にお願いするしかありません。学校経営は本当に大変なのです。お金がかかる部活を持っている学校についてはそういう危惧はありますが、小さな所で工夫しながら、後任の校長に引き渡す時には色々考えてやって来ていますと申し上げたいと思います。

１つだけ、委員長に検討会議で言って欲しい事があります。中間まとめの中で「総合学科を見直す」と書いているのですが、総合学科を止めるという事を含む気持ちがあるのではないかと感じている先生がいました。一生懸命にやって、それなりに実績も上げて、本校は入試の倍率も高いのですが、単純に見直しと書かれると先生方は非常にショックを感じます。ですから、例えば「系列を見直す」というような言葉を使っていただければと思います。

Ｌ委員

今回の会議の方向性として、私は前回の積み残した３つの学科について前半で話し、その後、中間まとめについて１つ１つチェックして、次回のまとめに進むと思っていました。決して否定ではないのですが、この先どうなるだろうかという漠然とした話で終わっていて、再編や統廃合に向かった具体的な話に進んでいない気がします。

この会議も５回を数え、これから新たな議題について話し合うのは困難だと思うのですが、なぜ高校と高校の連携について話をしなかったのかという事があります。中高、高大の連携の話は議題としてありましたが、この会議の方向性としては高校の再編、統廃合に向かうのでしょうから、前段階として高校と高校で連携をしてみて、教員や生徒が複数の高校を行き来したりして、高校間や地域で、大きな学びの固まりができないのかと思います。

先程実学が大切だという話がありましたが、そのとおりだと思います。大学に行く時にも何かの職業を目指して行く訳ですから。普通科の生徒でも農業高校に行って、実際に植物の栽培について学んだり、実習体験等をする事は非常に大切だと思います。また、工業高校からの進学という話も出ましたが、そういうノウハウは普通高校の方が多少は持っているでしょうから、普通高校の人材を活用するなど、高校と高校の連携を考えて、そこから統廃合や再編に進む事ができるのではないでしょうか。そういう視点はこの会議では出ませんでしたが、県教育委員会はどこかで考えているのでしょうか。県全体として今後の高校教育を考えた時に統廃合へ向かう必要があるならば、まずは高校同士が交流・連携してから統廃合や再編へ向かう事を考えてはどうかと思います。

何の交流・連携もないままいきなり統廃合するのでは、他の高校でも同じような教育ができるかどうかも分からずに、自分の地域の学校や学科が消えるのに釈然とせず、結局は自己の所属する学校や学科を守りたいという意識が働いてしまうのではないでしょうか。

高山委員長

中間まとめの中では、方向性として高大連携などについて話していますが、話しきれていないのは地域性についてです。学校配置が偏在しているのが、地図で見るとはっきり出ていますし、生徒数の減少があるので統廃合の対象となるのですが、それをどうするという話としては、我々は個々の学校についてどうすると決めるのではなく、中間まとめと最終答申で方向性を出すのですから、時間的に反映させるのは可能だと思います。

佐々木副委員長

３月の検討会議で話したのは、県は県民局という形で地域になるべく近い所で地域に必要な施策を考えて行こうとしています。県教育委員会ができるのかは分かりませんが、同じように、その地域で高校同士が連携について話し合い、その話し合った結果がそのまま終わるのではなく一定の予算・権限を持って実施に移していくという仕組みができないかという話をしました。地域の事は地域で具体化して行く事が現実に即するのではないでしょうか。

Ｉ委員
　中学生や保護者には普通科志向があるという話ですが、数字的裏付けについて考えてみました。もし、そうであれば高校入試において普通科が１倍をきる事はないはずですが、現実には高校入試の倍率を見ると普通科で１倍をきる所がたくさんありますから、単に普通科志向という事ではないだろうと思います。
　専門高校であれば６割が就職し、その４割が県内に就職しますので、全体で見ると「２～３割しか県内に残らない」と言われますが、ほとんどが大学に行く進学校では、県内に最終的にどれだけ戻るのか見えません。大学に進学した人間が何人戻るのかと考えると、専門高校の生徒は「２～３割も地元に就職し貢献している」と言えるのではないでしょうか。新聞を見ると、人が非常に少なくなって大変で地域経済が危ういと言われていますが、地元に残って地域に貢献しているのは専門高校を中心とした高卒者であるという事も考えに入れながら進めていただきたいと思います。

高山委員長
　中央の景気がいいのでほとんど戻って来ませんし、地元企業も結局地元大学を中心に採用しているようです。人口ピラミッドから見ると団塊の世代がどんどん退職しますので、県出身者がいくらかでも帰って来てくれるといいと思います。理想としては、その人が会社を設立して若い人を雇用してくれればという望みはあるのですが。人の動きは就職に関連しますので、中央で景気が悪くなると溢れて戻って来る訳ですから、一段と厳しくなる事が予想されるので、そうなると実業系の高校が強いのではないでしょうか。ただ減るばかりではなく、専門教育の強みをPRしても良いのではないでしょうか。
　水産、家庭、看護については、皆さんの意見としては存続するべきであり、地域にとって有用であるというお話でした。
　第１専門委員会の統廃合の部分について、第２専門委員会からボールを投げかけた方がいいのではというお話でしたので、次回の検討会議で話したいと思います。
　１０年先を見据えた部分では、実学に近い部分、民間の協力を得た方が、校長先生が苦労しなくてもいいのではないでしょうか。
　このような取りまとめになると思いますが、お聞きしたいのは、普通高校と職業高校の在るべき生徒像についてです。

Ｋ委員
　多様なタイプがあっていいのですが、最終的にその子がどういう職業に就きたいのか、どういう分野を学びたいのかですので、それをたどって行くと普通科は進学となる訳です。経済格差の問題が言われていますが、上級学校へ進んだ方が将来のために良く、安定した収入が得られるという意識が強くなるのではないかと思っています。ただ、学校としては、生徒が調理師やトレーナーをやりたいと言うのであれば、それで頑張ってくれればいいのですから、普通科であろうが、専門高校であろうが、最終的には自分でこういう職業に就きたいと考えてくれれ

ばいいのです。そこが一番大事です。

高山委員長
　今日の検討課題は以上ですが、言っておきたい事がありますか。

Ｆ委員
　第１専門委員会からの、普通科の割合を高めるのが望ましいというのは違うと思います。中学生や保護者の考えは、大学進学を前提として普通高校を望んでいるという事です。私学や特殊教育なども含めると８割くらいは上の学校へ行っているのですから、高卒では恥ずかしいという雰囲気になっている気がします。そう考えると、高校を卒業して２～４年を下手な学校で過ごすよりは、企業にお願いして給料はいらないから使ってもらった方が良いのではないでしょうか。そこまでは言えないでしょうが、やはり普通高校志向にならないようにして欲しいです。職業高校は本当に大事なのだという事を強力に出して欲しいです。大学も人集めに必死でしょうから、いくらでも生徒を入れるのですから。

Ｈ委員
　専門高校からも上級の学校に入る事はできますし、出口を考えると、むしろ専門高校の方が選択肢の多い場合も決して少なくないと思います。

高山委員長
　今後の進め方ですが、今回いただいた意見を検討会議で話したいと思います。併せて、パブリックコメントのようにして、中間まとめに対して多方面から意見を聞いてるのですよね。

事務局
　現在ホームページで意見を募集しています。また、高校長協会と中学校長会に意見を伺っています。

高山委員長
　それを踏まえて最終答申という事になるのですね。
　中間まとめの中で、第２専門委員会のリードの部分と言いますか、社会環境の変化の説明が足りなくて、社会背景が分からないままに話が進んでいると感じていますので、少し文章を考えて皆さんに郵送でお渡しして見ていただきたいと思います。もう少しふくらませて、まとめに加えたいと思います。
　これからのスケジュール等について事務局からお願いします。

●閉会

司会
　次回の会議は８月を予定しておりますが、皆様の御都合もあると思いますので、日程を確認・調整の上、改めて日時会場等の詳細につきまして、文書にてお知ら

せさせていただきます。
　以上をもちまして第５回第２専門委員会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。